

らない。もつとも、この場合、自己の主張が必ずしも真に近代的な理念に支えられているとは言いきれないであろう。それは前述の内面的な矛盾葛藤煩悶における人間そのものの追求の欠除をもたらし、た人間凝視の不十分さにも見ることができよう。それらの矛盾や煩悶の姿勢が、たとえ南翠自身の具体的な体験に立脚しないとしても、自己凝視の上に得られた近代的人間形成の苦悶に投影せしめたならばまた形象化し得ることも予想されるのである。所詮、当時の啓蒙家の常として、まだ現実との闘いの上に、勝目を持つていると信じていた楽観的風貌には、自己凝視より自己否定へ通ずる道は遠いものがあり、したがってそこに真の近代的人間の誕生はのぞむべくもなかつたのである。

しかしながら、その楽観的な啓蒙的情熱のもつロマン性が、ようやく旧套の戯作的方法を脱して、現実的な人生への注目と、新旧思想調和の方向を見せた過渡的作品として、「雛黄鸝」一篇は、彼の作品としても、また当時の文壇においても優れたものとしなければならぬ。

当時、文壇の一方の雄として饗庭篁村があつた。彼もその楽観的な啓蒙的情熱にまかせて、この種の小説を書いているが、共に実利主義的ないしは折衷的な便宜主義に立つものであり、真の近代をのぞむべくもない。しかし、現実との接触を失つてゆく硯友社文学の抬頭期に、よく実人生との関わりを保つたものとして、黙視することではできない。

(三六・五一〇)

堤中納言物語「このついで」の典拠について

土 岐 武 治

者の交渉関係について、茲に改めて私見を開陳することにする。いま「雨夜の品定め」と「このついで」との構想に於ける物語の基本的な個所を指摘してみると次のやうになる。

その第一として、二者それぞれの冒頭の一文に、

○なが雨暗間なき頃、内裏の御物忌さし続きて、いと長居侍ひ給ふを(源氏 帚木巻)

○はるのものとてながめさせ給ふひるつかた云々(このついで)

とある通り、帚木の巻の体験談も「このついで」の見聞談も、共に場面的时候は紅梅の香る春雨の頃となつてをり、物語る場所も同じく宮中なのである。

その第二として、源氏物語、雨夜の品定めに於ける三体験談のうち第一話は、右馬頭自身が語る指食ひの女・木枯の女との関係がそれであり、第二話は、頭中将自ら語る常夏の女との実話談であり、また第三話は、式部丞自身が語る藤くひの女との関係といふやうに、経験談の体裁はそれら三種の小話から構成されてゐるのである。このやうな配列の趣向に対し「このついで」の第一話は、或る貴公子と身分のある女との間に出来た稚子を中にしての情話を語る中将の見聞談であつて、第二話は、中納言が昨年の秋に、清水寺で世を厭

一

わが国の古典物語中には、三つの事件・三種の人物・三階級の身分とか、或は一作品の構設を三つの素材から取扱ふとか、とにかく結構上三様から組立てられるものが頗る多い。例へば、物語の祖といはれる竹取物語は、竹取翁譚・妻争ひ説話・羽衣伝説とからであるし、源氏物語帚木の巻の雨夜の品定めは、三つの体験談からなり、また落窪物語の継子いぢめの説話も、第一・第二・第三といふ三部から成立つてゐるのである。これらは、その一考証に過ぎぬが、堤中納言物語十篇中の「このついで」も、次に解説する通り、第一話・第二話・第三話といふ三つの見聞談から成り立つ短篇物語である。後段に詳述する通り、これら三様の小話配置の構段は、源氏物語、帚木の巻の冒頭に見える「雨夜の品定め」の三体験談の趣向を模したものである。この点については、国語と国文学、昭和十五年七月号所載、「このついで」と題する倉野憲司博士の論文や小著「堤中納言物語新解」中の当該篇の品評欄にも一応指摘してゐるのであるが、その後更に両者の関係を種々検討すれば、従来の実証の内容に未だ不十分と思はれる諸点もないわけではないので、以下両

堤中納言物語「このついで」の典拠について

ふ女性を障子越しに覗いたといふ追憶談であり、また第三話は、嘗て少将君が伯母の勤行する東山辺のお寺に詣でた時、其処で尼にならうとする女の状況を窺見した場面の追憶談といふ風になつてゐる。このやうな三つの見聞談を一つの物語に収めたものが、即ち「このついで」なのである。しかもその際、かれとこれとに見えるそれそれの小話はともに並列的な三様の配列に仕組まれてゐる。

次に、右の「雨夜の品定め」と「このついで」の登場人物を比較してみると、「雨夜の品定め」では、光源氏・頭中将・右馬頭・式部丞などとなつてゐるが、「このついで」の場合でも、それと全く同様に中宮・宰相中将・中将の君・少将の君となつて両者は全く同人数で、しかも前者では源氏君を、後者では中宮を除いて、一人一話題を担当することになる。ただ右の場合「雨夜の品定め」では、若いそれらの男性たちが一貫した女性品評によつて、その場面が統一されるのに比べ、「このついで」では、人生を廻り下げて行く作意もなく、単に各小話の共通する気分や情緒によつて、三様の見聞談の統一を脱つてゐるのである。それ故、「このついで」の作者は、文格にもその効果を計つて、第一話の恋愛、第二話の厭世、第三話の出家といふそれぞれの小話には、

○こだにかくあくがれいてばたきものゝひとりやいとゞおもひこがれむ（第一話）

○いとふみはつれなきものをうきことをあらしにちれるこのはなりけり（第二話）

○おぼつかなりきよそむくはたれとだにしらぬながらもぬるゝそでかな（第三話）

つとおはするほどに、前斎院よりとて、散り過ぎたる梅の枝につけたる御文もてけり。宮、聞し召す事もあれば、「いかなる御消息のすゝみ参れるにか」とて、をかしと思したれば、ほゝ笑みて、「いと馴れ馴れしきこと聞えつたりしを、まめやかに急ぎものし給へるなめり」とて、御文は引き隠し給ひつ。沈の箱に、瑠璃の坏二つすゑて、おほきにまろがしつゝ入れ給へり。心葉、紺瑠璃には五葉の枝、白きには梅を選りて、同じくひき結びたる絲のさまでも、なよびかになまめかしうぞし給へる。

このやうな雰囲気の中で、兵部卿の宮は隔なく源氏君と談笑してゐると、そこに朝顔斎院から梅の枝に御文を結び付けて持つて参ることになる。源氏もまた香の調合を頼んである方々に、「今日の雨湿りを幸に今晚ためしませう」と言はれて使を出すのであるが、その一文に、

D このついでに、御方々の合せ給ふども、おのおの御使して、「この夕暮のしめりにこころみむ」と聞え給へば、さまざまをかしうしなして奉れ給へり。「これわかせ給へ。誰にか見せむ」と聞え給ひて、御火取ども召してこころみさせ給ふ。

とある。源氏君は薰物合をしようとなされ、かねて用意の香を掘らせるのである。一方「このついで」の冒頭文は、次のやうになつてゐる。

A はるのものとてながめさせ給ふひるつかた、だいばん所なる人人は「宰相中将こそまゐり給ふなれ、れいの御にほひいとしるく」などいふほどに給ひて、「夜べよりとのにさぶらひしほどにやがて御つかひになん。ひんがしのたいのこうばいのしたにうづ

堤中納言物語「このついで」の典拠について

と詠んだ和歌をそれぞれ一首づつ配置して、該小話の格致に歌物語的色彩を添へ、しかも第一話の背景には春雨、燻物の香り、第二話には嵐に散る落葉の時候、第三話には美女の落飾を惜しむ雰囲気を含へさせてゐる。従つて「このついで」に於ける物語の基本的要素は、「雨夜の品定め」のそれを模倣しながらも、右に解説する如き新意匠を施すところに、作者の文学創意が窺はれることになる。

二

「このついで」の発端と源氏物語、梅枝の巻の冒頭箇所との交渉については、村上忠順（一八二三—一八八三）自筆本の端書、伴直方（一八四二歿）の夏山雜山所収「薰物をかくといふこと」をはじめ、前記する倉野憲司博士の論文中にも、種々卓説が見えるのである。しかし、それらの考証中には未だ不十分な向きも多々見受けられるので、次に、私は右に示す両者の影響関係を具象的に指摘し、種々論証することにする。

源氏物語、梅枝の巻の冒頭の内容について略述すれば、正月の晦日頃から六条院では、明石姫君の装束の準備に、薰物合の秘法を互に競ひ合ふことになるが、或る日、螢兵部卿宮がお出でになつて、源氏君と四方山の話が交はされるといふ場面がそれである。ところで、行文の必要上この荒筋の一節の原文を登載すれば次の通りになる。

A 二月の十日、雨すこしふりて、御前近き紅梅さかりに、色も香も似るものなき程に、兵部卿の宮渡り給へり。御いそぎの今日明日になりけることと、とぶらひ聞え給ふ。昔より取りわきたる御中なれば、隔なくその事か事となく聞え合せ給ひて、花をめで

ませ給ひしたきもの、今日のつれなゝに心みさせ給ふとてなん。」とて、えならぬえだにしろがねのつぼ二つつけたまへり。中納言のきみ、御ちようのうちにまゐらせ給ひて、御ひとりあまたして、わかき人／＼やがて心みさせ給ひて、すこしさしのぞかせ給ひて、御ちようのそばのおましにかたはらふさせ給へり。こうばいのをり物の御ぞに、たゞなはりたる御ぐしのすそばかりみえたるに、これかれそこはかとなきものがたりのしのびやかにして、しばし候ひ給ふ。

D 中将のきみ、「この御ひとりのついでに、あはれと思ひて、人のかたりし事こそおもひでられ侍れ。」との給へば、おとなだつさい相のきみ「なに事にか侍らん、つれなゝにおぼしめされて侍るに、申させ給へ」とそゝのかせば、「さらばついたまはんとすや」とて云々

これら二作品に伝へる二様の構趣を比較対照するに、先づ梅枝の巻では、「香どもは昔今の取り並べさせ給ひて、御方々に配り奉らせ給ふ」・「かたみに挑み合はせ給ふほど」・「いづ方にも御前に侍ふ人あまたならず。御調度どもも、そこの清らを尽し給へる中にも」などと、六条院では薰物合の秘法を競つてをり、また源氏君についても「大臣は寝殿に離れおはしまして承和のいましめの二つの法を、いかでか御耳には伝へ給ひけむ心にしめて合はせ給ふ」とあつて、源氏は独り寝殿に離れて一心に調合してをられる。ところで「このついで」の右の当該場面でも、「御ひとりあまたして、わかき人／＼やがて心みさせ給ひて」などであり、中宮は香爐など沢山用意され、若い女房達に早速試みさせる。中宮についても「すこしさしのぞか

せ給ひて、御ちようのそばのおましにかたはらふさせ給へり。」とあつて、中宮御自身もお覗きになられるという仕組みになつてゐるので、前に掲載する梅枝の巻と「このついで」篇の文面のもつ事象の趣は勿論のこと、文辭の技法に至るまで、誠に似通ふことになる。殊に右の場合両作品に見える季節は、「二月の十日、雨すこしふりて、御前近き紅梅さかりに云々(梅枝巻)」に対し「はるのものとてながめさせ給ふるつかた……紅梅のしたにうづませ給ふ。(このついで)」とある。紅梅が匂ひ、春雨が静かに降る構想上の共通した背景の中で、これら両様の物語が展開されて行くやうに配備されてゐる。

梅枝の巻では、この場面中に源氏の弟に當る螢兵部卿宮が、「御いそぎの今日明日になりける(明石姫君の御裳着の祝が今日明日に迫つて、さぞかし御多忙でせう。)」といつて来訪される個所が見える。これが丁度、「このついで」の右の場面にも、宮中で燂物合を試みるところに、中宮の兄弟と思はれる宰相中将が、「夜べより殿にさぶらひしほどに、やがて御つかひになん云々。」といつて参上する部分がある。また梅枝の巻に「梅の枝につけたる御文もて参れり……沈の箱に瑠璃の坏二つすゑて、大きにまろがしつゝ入れ給へり。」とあつて、前斎院から源氏のところへ梅が枝の御文を届けられるのに対し、「このついで」では、「えならぬえだ(紅明)にしるがねのつぼ二つつけ給へり。」と伝へ、宰相中将が中宮へその枝を持つて上るといふ具合に、この場合も両者は相一致することになる。

このやうに、梅枝の巻と「このついで」篇との発端を比較してく時、これらの趣向は如何に酷似するかは容易に納得されるばかり

るものなき程に、兵部卿の宮渡し給へり。

と伝へれば、同じく「このついで」篇にも

はるのものとてながめさせ給ふるつかた、だいたん所なる人々「宰相中将こそまゐり給ふなれ。れいの御にはひいとしるく」などいふほどに、つゝい給ひて云々。

と見える。つまり、梅枝の巻のこの部分は、六条院の軒端の紅梅は、雨に濡れながらも今を盛りの色香を漂はせ、そこへ兵部卿の宮は源氏を訪ねて来られるといふのである。このやうな構趣に対し、上例の「このついで」篇でも、そぼ降る春雨を中宮は物思はしげに見入つておいでになる昼近い頃、台盤所の女房達は、「参議中将がお出でになつたらしい。例の御召物に燂いだ匂が大層はつきりしてゐます。」などといつてゐる中に、中将は中納言の前に現はれるといふ筆法である。このやうに彼と此との物語機構上の類似は勿論のこと、詞辭上、例へば「雨すこしふりて(梅枝巻)」と「はるのものとてながめさせ給ふ(このついで)」、「紅梅さかりに色も香も似るものなき程に(梅枝巻)」と「れいの御にはひいとしるく(このついで)」、「兵部卿の宮渡し給へり(梅枝巻)」と「宰相中将こそまゐり給ふなれ(このついで)」などの類語も数多く指摘することが出来る。しかも「このついで」篇では、冒頭に「この御ひとりのついでに云々」と伝へる通り、燂物合のついでに上記三見聞談が次々と始まるのであるが、梅枝の巻に於いても、燂物合のついでに「おほみきなど参り給ひて、昔物語などし給ふ」とあり、燂物合のついでに、源氏君を中心に集る方々は昔の物語で興に入るといふやうに両者は共に同巧の手法となつてゐる。

でなく、上載の文章面に於いても、傍線AとA'、BとB'、CとC'、DとD'の詞辭の類語をも数多く持つてゐる。更にまた「上は東の中に放出に、御しつらひ殊に深うしなさせ給ひて云々(梅枝巻)」といふ紫上の動作と、中宮が「すこしのぞかせ給ひて御ちようのそばのおましにかたはらふさせ給へり。(このついで)」となさる態度ともその趣きは稍々似通つてゐるやうに思はれる。

梅枝の巻に見える右の「二月の十日云々」とある例文の後段にさてこのついでに、御方々の合はせ給ふども、おのおの御使して、「この夕暮のしめりに試みむ」と聞へ給へば、様々をかしうしなして奉れ給へり。「これ判かせ給へ。誰にか見せむ」と聞え給ひて、御火取ども召して試みさせ給ふ。

と見える。この個所は、源氏君が香の調査を以前から依頼する方々の処に、燂物合の案内を遣ひする一節であるが、これが丁度、「このついで」の冒頭にも「……やがて御つかひになん、ひんがしのたいのこうばいのしたにうづませ給ひしたきもの、今日のつれづれに心みさせ給ふとてなん」とあつて、中宮から宰相中将が燂物合の御遣ひを頂くこの手法は、同趣の感を抱かせる程似通つてゐる。しかもこの場合、「この夕暮のしめりに試みむ(梅枝巻)」と「今日のつれづれに(このついで)」と、「さてこのついでに御方々の合はせ給ふどもおのおの御使して(梅枝巻)」と「この御ひとりのついでにあらはれと思ひて」と見える上載相互の語句なども、また頗る近似することになるだらう。

次に、右にも掲載する梅枝巻に、

二月の十日雨すこしふりて、御前近き紅梅さかりに、色も香も似

以上論証する諸条件を綜合して来る時、堤中納言物語の一篇をなす「このついで」の冒頭は、源氏物語、梅枝の巻の発端の直接影響によつて成立したものと臆断しても、決して不自然なことはあるまい。

三

三小話から成る「このつかで」篇第一話の筋書きを解説すれば、即ち、或る女の許に忍んで通ふ男があつて、二人の間には可愛い子供まで出来た間柄となる。そこで男はやかましい妻に遠慮して、女の方へは絶え間がちであるにも拘はらず、非常に子供が自分を慕ふので可愛らしくて、時々自分の本宅に連れ出すなどしてゐた。ある時、男は久し振りに例の女の所に立寄つて、子供の頭を撫でるなどして、可愛がるのであるが、急に餘儀ない用事があつて帰らうとする。すると、子供は後を慕ふので、仕方なくその子を抱いて出ようとする。女はひどく淋しうに見送りながら前にある火取(独り)を手なぐさみにして、歌一首を口ずさむのであるが、それを聞く男はいぢらしく思ひ、子供を返してそのまま女のところに留まるといふ話になつてゐる。

さて、「このついで」第一話の内容に似通ふ源氏物語、頭中将の体験談の概要は次のやうになつてゐる。私(頭中将)は、嘗てある女に忍び通つたことがある。その女は、こちらが絶え絶えの間でも一向気に止めることもなく、信じてくれるのである。二人の間に子供が出来るとなると、一層私を信するやうになつた。ところがこちらが久しく通はぬ間に、その女の許へ嚇したので、彼女は心細さのあまり、稚子もあつたのですから撫子の花に一首の歌を添へ、

私（頭中將）へ送つてよこした。たまりかねた私（頭中將）は女の許に走り、幼児はともかくとして、女の機嫌をとることに努めたといふ体験談になつてゐるのである。

このやうな筋書を有する二小話の内容を比較して、その結果両者の密接な諸点を指摘すれば、次の通りになる。

その第一は、両作品の登場人物は、共に男・忍び女・幼児・正妻となつてゐるといふこと。その第二は、男の本妻は主人の懸想人に干渉するやうになる。その第三は、この男と忍び女との間に子供が出来る。その第四は、女は男の絶え間がちの場合でも、決してそれを氣にするやうな態度を見せないといふこと。その第五は、この女の方から例の男へ苦衷を歌に托して贈るのである。その第六は、女の胸中を察した男は、女の許に行つて懸命に可愛がるといふ上記の諸条件やその構成順序は全く符合することになる。

次にこれら両様の文章面に於ける語句上の類似点を吟味するに、(1)「いと忍びて見そめたりし人の（帚木巻）」と「しのびてかよふ人や有りけん（このついで）」、(2)「久しきとだえをまかうたまさかなる人とも思ひたらず（帚木巻）」と「たえまがぢにてあるほどにおもひもわずれず（このついで）」、(3)「この見給ふるわたりより、清なうたである事をなむ、さる便ありてかすめいはせたりける（私の妻のところから思ひ遣りなく嫌な事を、さるべきついでにそれとなく云ひやつたとの意。帚木巻）」と「あはれとはおもひきこえながら、きびしきかたつかたやありけん（男にはやかましい奥方があつて、それに遠慮してのためかとの意。このついで篇）」などは、略々近似するものと思ふ。殊に帚木の巻での女から男へ歌を贈る場

合に撫子（稚児）の花を添へる心情と、「このついで」に於て例の男が子供を連れさうとすると、女は火取（独り）を手まさぐりしながら歌を口吟んで、男へ自分の胸中を暗示する場面、しかも、この求愛に両作品の男は動かされて、女を痛はるといふ物語の雰囲気に至るまで、これら二つの作品は全く同巧の描写となつてゐる。

堤中納言物語の一篇をなす「このついで」について、尾崎雅嘉（一七五—一八二七）自筆本の端書に、

入江喜喜（「煮」ノ誤）云、此物語兼輔卿歟、発端の語に春のものとてながめさせ給ふひるつかた、たいばん所なる人々宰相中将こそ参給ふなれと云々、是兼輔卿みづからの事を書き給へる歟。此次に云、此御火とりのついでにあはれと思ひて人のかたりし事こそおもひ出られ侍れといふより末十段まで中将の物語也。と伝へる。

雑誌典籍、第百十七冊至第二十一冊所載拙稿「十冊本堤中納言物語とその研究」に詳述する通り、堤中納言物語諸本中、同物語十篇の配列の順序を調査するに、六種類に分けられる。これらの体裁中、契沖校本系統の写本は、いづれも「このついで」篇が最初に収められてゐるのである。右に例載する通り、入江喜喜（一七二三—一八〇〇）は、契沖校本系統の明静院本であらう、この写本に従つて「発端の語に春のものとて云々」といふやうにいつてゐる。

ところで大和物語百三十段（日本文学大系二巻）に、三条右大臣の女、堤中納言に逢ひはじめ給うける間は、内蔵助にて、内裏の殿上をなむし給うける。女は逢はむの心やなかりけむ、心もゆかずなむいますかりける。男も宮づかへし給うければ、え

常にもいまさざりけるころ、女

薫物のくゆる心はありしかどひとり絶えて寝られざりけり

かへしは、上手なればよかりけめど、え聞かねば書かず

と見える大和物語の兼輔説話と、堤中納言物語の発端「このついで」の第一話とは、全く同一のものと誤認したのである。

四

「このついで」の第二話の概要は次のやうになつてゐる。

去年の秋頃、清水寺に参籠した折に、私（中納言君）の傍へ、ほんのかりそめの屏風ばかりを立ててしきつた局があり、そこからもれてくる煙物の香も奥ゆかしく、人も大勢でない様子で、時々泣くけはひなどしながら勤行してゐるのを、これは一体誰だらうと耳をすました。いよいよ参籠も終つて、明日帰らうといふ夕方に、風が非常に荒々しく吹いて、木の葉ははらはらと河瀬の方へ吹き乱れ、色の濃い紅葉などは、局の前に隙間もなく散り敷いてゐるのを、隣りの局と仕切りになつてゐる前に寄つて、景色を眺めてゐたら、大変忍びやかに「いとふみはつれなきものを」と歌を口吟み、また「風の前なる」との古歌も口にしたのを聞きつけた時は、本当に心から氣の毒に思つたが、やつぱり直ぐには挨拶はしにくく、きまりも悪くてとうとう止めてしまつたといふ体裁になつてゐる。

さて、源氏物語、手習の巻中に、「このついで」の第二話の輪郭に似通ふ面場が次の通りに見える。

横川の僧都の妹は、比叡の麓に当る小野の庵に住んでゐる。この妹尼が初瀬詣の帰途、宇治川に身を投じた浮舟を救つて、この小野

の庵に、今は亡き女と思つて大事に世話をするのである。浮舟は

「思ひ餘る折には手習をのみぞたけき事とは書きつけ給ふ。（手習

巻）」とのやうに暮すのである。かつて尼君の婿の中将が小野の庵

室を訪ねた時に、「尼君、障子口に几帳を立てて、そこで中将にあふこ

とになる。そのあと、中将は侍女の少将の君といふ人と呼んで、色

々と昔のことを語るのであるが、その時少将へ、

かの廊のつま入りつる程は風の騒がしかりつる紛れに、簾の隙より、

り、なべての様にはあるまじかりつる人の折垂髪の見えつるは、

世を背き給へるあたりに、誰とぞなむ見驚かれつる。

とおつしやられる。これは、あの廊の端をこちらへ来る時、風が激

しく吹いた拍子に、簾の隙から平凡とは思はれない人の垂髪の見え

たのは、この草庵にどんな方がゐるのだらうと尋ねるのである。中

将は、待つてゐた秋雨も霽れ、日も暮れさうになつたので、横川に

出駆けようとなさる。その際尼君と浮舟との忍び話が交はされるの

であるが、浮舟は尼へ

隔て聞ゆる心は侍らねど、怪しくて生き返りける程に、よるづの

事夢のやうにたどられて、あらぬ世に生まれたらむ人は、かゝる

心地やすらむと覚え侍れば、今は知るべき人、世にあらむとも思

ひ出でず。ひた道にこそ睦ましく思ひ聞ゆれ、

といふ描写がそれに当る。いまこれら両場面の取材を具体的に比較するに、場所は清水寺（このついで）に対し小野尼寺（手習巻）、

登場人物は中納言君・尼君・受戒の女（このついで）に対し、中将（尼君の婿）・尼君・浮舟（手習巻）、事件は中納言は出家する女を

覗くのに対し、中將が出家を望む浮舟を覗く(手習巻)、背景は共に木葉散り行く秋となつて、両者の場面構成の材料は上に挙示する通り全く符合することになる。単に右の両場面の結構や登場人物、又は背景などの合致するばかりでなく、物語構想の展開や両作家の心的態度に至るまで同巧の筆法で終始するといへよう。次にこれら両文に於ける部分的な趣向や文辭の近似点を叙述して、一層両者の交渉關係を証明することにする。

その第一、「このついで」第二話へ交渉を有する手習巻中には、「雨(村雨)の気色を見わづらひて」、「風の騒がしつる云々」とあれば、この「このついで」の第二話にも、「こぞの秋ごろはばかりに」、「風いとあらゝかにふきて」とあつて時候の描写も略々同じ筆となる。

その第二、中將は横川についた。その夜中將の弟である禪師君といろいろ物語が始まる序に、中將は、小野の庵で少將を尋ねる事柄をつづけて、

風のふきあげたりつる隙より、髪いと長くをかしげなる人こそ見えつれ。あらはなりと思ひつらむ、立ちてあなたに入りつる後手、なべての人とは見えざりつ。さやうの所に、よき女は置きたるまじきものにこそあめれ。日暮見るものは法師なり。自ら目馴れて覚ゆらむ。不便なることぞかし。……いかなる人にかあらむ。世の中を憂しとぞ、さる所には隠れむけむかし。

と告げる。ところがこのやうな手法は「このついで」篇にもたゞびやうぶばかりをものはかなげにたてたるつづねのほひいとをかしう、人ずくなゝるけはひして、をり／＼うちなくけはひ

などしつゝおこなふを、たれならむとき、侍りしに云々

とあるなど、場面の格致は頗る近似してゐる。殊にこの両文辭に於いて、「風の騒がしかりつる紛れに、簾の隙より」(手習巻)と「たゞびやうぶばかりをものはかなげに云々(このついで)」、「いかなる人にかあらむ(手習巻)」と「たれならむ云々(このついで)」などにも似通ふのである。

その第三、「このついで」では、中納言君が、上記の通り去年の秋清水寺での出来事を一座の方々に物語るのに対し、前記の如く中將は小野の庵を訪ねた時の事柄を横川僧都に「小野に立寄りて、物あはれにもありしか云々」とか「風の吹き上げたりつる隙より云々」とか又「あはれなりける事かな。いかなる人にかあらむ。世の中を憂しとぞ云々」、「しのびたる様にて物し給ふらむは、誰にか。」などと語る趣向も略々「このついで」篇のそれと同種な構想となるのである。

五

源氏物語、手習の巻に、浮舟は宇治川に身を投じたが、たまたま初瀬詣の帰途にあつた小野の尼君の一行に救はれて小野の庵に伴はれる。尼君は失つた女の再生で観音のお授けとばかり喜んで愛したが、尼君の再度の初瀬詣の留守中、浮舟は来合はせた横川の僧都に乞うて髪をおろす一節が見える。この浮舟受戒の場面が堤中納言物語「このついで」の第三話の著述材料に取り上げられたものと思ふ。以下これら両者の典故關係を論証するに当り、行文の都合上「このついで」第三話の梗概を左に記載すれば次の通りとなる。

第三話は、少將の君の見聞談であるが、この少將の伯母が東山のある寺でお勤めをしてゐたので、自分は其処に行つた時の出来事である。庵主の尼君の処に、気高く綺麗な若い女が人目を避けて滞在してゐるが、何か深い事情がありさうなので、どうか様子が知りたいて思つて、障子に穴をあけ、そつと覗いて見た。二・三人のお坊さんに取囲まれたこの女は、頻りに尼になることを嘆願されるのであるが、さすがにお坊さんは躊躇してゐる。でもその女のせがむ決心に動かされ、「それでは止むを得ません」と言つて髪をおろしてやつた。妹君をはじめ、二・三人の女房達も皆泣き崩れてゐるが、これを覗き込む私(少將の君)までが悲しくなり一首の歌を作つて悲しみをのべると、妹君からは立派な返事が来、いま更自分のそそかしいやり方に後悔させられたといふのが、この小説の筋書きである。ところで、第三話の冒頭本文に

いたうくちをしからぬ人／＼のけはひあまたし侍りしをまぎらはして人にしのぶにや、とみえ侍りし。……きよげなるほうし二・三人ばかりすゑて……このあたるほうしちかくよびてもものいふ、なに事ならんときゝわくべきほどにもあらねど、あまにならんとかたらふべきにやと見ゆるに云々(このついで)

と伝へる。これが丁度、源氏物語、手習の巻で、世の中に侍らじと思ひ立ち侍りし身の、いと怪しくて今まで侍るを心憂しと思ひ侍るものから、よろづに物せさせ給ひける御心ばへをなむ、いふかひなき心地にも思ふ給へ知らるゝを、なほ世づかずのみ、遂にえとまるまじく覚え侍るを尼になさせ給ひてよ。例の人にて永らふべくも侍らぬ身になむ、

堤中納言物語「このついで」の典故について

との通り、出京の途中、小野を訪ねた横川僧都や、庵室の二人の大徳たちに取囲まれた浮舟が落飾を嘆願する場面に模してゐるのである。殊に右の「このついで」の「あまにならんとかたらふけしきにやと見ゆるに」と、この「手習巻」の「なほ世づかずのみ遂にえとまるまじく覚え侍るを尼になさせ給ひてよ」との文辭の同巧や、また「このついで」第三話の「きよげなるほうし二・三人ばかりすゑて、いみじくをかしなりし人、きちやうつらにそひふして、このあたるほうしちかくよびてもものいふ」と、手習巻の「いづら大徳達こゝに」と呼ぶ。はじめ見つけ奉りし二人ながら供にありければ、呼び入れて、御髪おろし奉れといふ。」とある同種の格致も、両者の影響關係を物語るものと考へられよう。

「このついで」篇第三話文中に、僧侶が女の出家の希望を入れられる場面即ち

几帳のほころびより、くしのはこのふたに、たけに一しやくばかりあまりたるにやと見ゆるかみのすぢ、すそつきいみじう／＼つくしきを、わけいれておしひだす。(このついで)

と見えるこの箇所は、手習の巻で僧都が浮舟の固い覚悟に落飾させられる場面即ち

几帳の帷子のほころびより御髪を掻き出だし給へるが、いとあたらしく、をかしげなるになむ、暫しは鉄をもてやすらひける。

と伝へる趣向上、文辭上共に全く符合してゐるのである。次に手習の巻で、中將(かつての尼の婿)が庵主の尼君に浮舟の姿を見たいと乞ふ場面に、

様かはり給へらむ様を、いささがみせ給へと少將の尼にのたまふ。

……男は、いかに見奉り給はむと思ひて、さるべき折にやありけむ、障子のかげがねのもとにあきたる穴を教へて、紛るべき几帳など引き遣りたり。

とあり、殊に「障子のかげがねのもとにあきたる穴を云々」との如く、中將は障子の穴から覗くあたりは、「このついで」の第三話の語り手の少將の君が、

たゞ人とはおぼし侍らざりしにゆかしうて、ものはかなきさうじのかみのあなかまへいでて、のぞき侍りしかば云々（このついで）と姫君を覗く場面とも頗る酷似してゐるし、特に右の場合「障子のかげがねのもとにあきたる穴を云々（手習）」と「さうじのかみのあなかまへいでて云々（このついで）」の趣向や語句は、全く一致することになる。「このついで」の語り手の少將の君が姫君の容姿について、

めのとだつ人などはなきにや、とあはれにおぼえはべりてと感慨深げに述べるのであるが、手習巻でも、浮舟自身が、親に今ひと度かうながらの様を見えずなりなむこそ人遣りならずいと悲しけれ。

と嘆くのであつて、これら同巧の間にも著述上の影響関係が推定されるのである。中將が浮舟の容貌をのぞいた後浮舟に、おほ方の世をそむきける君なれど厭ふによせて身こそつられ。

大和申樂の芸質（中）

もくろく

I. はしがき

II. 観阿系ものまね能の一類型

III. 観阿から世阿へ

以上前号

IV. 世阿創作能における「大和」的性格

以下次号

V. 忠度を中心とする修羅ものの変貌

VI. 結崎能と金春能など

VII. むすび

IV. 世阿創作能における「大和」的性格

能の作品相互の関係は、じつに有機的・力動的であるから、小論も、しぜん、そういう性格を帯びてくる。この項についていえば、タイトルに掲げること、結果的に指摘するに留まらず、やはり、能作の流れを通して、とらえることになる。したがつて、前項のタイトル「観阿から世阿へ」の示す範囲に触れることにもなつてくるのだ。

大和申樂の芸質（中）

といふ歌を尼君から伝言させる。ところが「このついで」の方も少將の君がその女に、

おぼつかうきよ、そむくはたれとだにしらずながらもぬるるそでかな

と書いた歌を人に托して届けるといふやうに、この場合も又両者の描写の仕方は同筆となつてゐる。

以上の論証によつて、「このついで」の物語結構の組織は、帚木卷雨夜の品定め的手法に暗示を得、「このついで」の序曲と見るべき発端は梅枝の巻の冒頭箇所を典拠となし、「このついで」の三話見聞談中の第一話は、帚木卷の雨夜の品定めの中に見える頭中將と常夏の女との関係を典拠となし、その第二話は手習の巻で小野の庵主である尼君のところ、婿の中將が浮舟を覗く場面から直接の影響があるし、またその第三話は手習の巻で浮舟が横川の僧都に乞うて髪をおろす場面に依拠するなど、「このついで」の著述材料は、全く源氏物語中のそれらの直接影響によつて創作されたものと臆断するのである。

昭和二十六年三月一日稿

昭和三十四年十二月三十日補

昭和三十六年一月十日再補

味方健

求塚は、五音の上に「モトメツカ亡父曲サレハ人一日一夜ヲフルトタニ」と見えるから、観阿の手に成ることはあきらかである。談儀の、「拍子のつめひらき」の心得をのべた項では、「旅人の、道さまたげにつむものは……」のくだりの間（リズム）に触れている。プロットは、万葉集巻九に見える葦屋処女の伝説を骨子とする大和物語一四八段に拠つたと思われる。その点、観阿の作家的性格とあいまつて、あとにとりあげる、伊勢・源氏・新古今などを踏まえる曲どもにくらべて、ずつと素材である。

求塚の後シテは、その約四分の三を作り物（塚）の中で演ずる。塚は前段、女の墓どころであつた、後段では、出でんとして出でやらず、留まろうとして、あらゆる責め苦にさいなまれる火宅の表象になる。そして、おしつづめられた、ぎりぎりの苦しみは、大きな動きを許さない。みずからの動作としては、面バカリワキヘアツラフ（以下、カタカナ書きは、術語または型付けの抜き書き）ぐらい、あとは、「左右の手を取りて」と、かつて、彼女を争つたふたりの男の亡心に手を引かれる型、「頭をつつき髓を食ふ」と頭をおおう型があるが、これは相手からの強要による型である。舞はもちろん、はたらきごとをも挿む余裕は許されない。このような状態で、「光